漢詩を味わう　第71回

鍾山即事　王安石

澗水無聲繞竹流
竹西花草弄春柔
茅簷相對坐終日
一鳥不鳴山更幽

澗水声無く竹を繞って流る
竹西の花草　春柔を弄す
茅簷に相い対して坐すること終日
一鳥鳴かずして山更に幽なり

谷川の水は音もなく竹林を巡って流れ、
竹藪の西側では草花が春の柔らかな新芽をふいている。
茅ぶきの庵のなかで、終日山に対して坐っていると、
鳥一羽の囀りすら聞こえず、山はいっそう奥深く静寂である。

《鍾　山》南京市の東北郊外の山。
《即　事》見たままを詩につくること。
《澗　水》谷の流れ。
《弄春柔》若い柔らかな新芽が露われること。「春に弄れて柔らかなり」という解釈もある。
《茅　簷》茅葺きの軒。転じて茅屋。
《相　對》何と対しているかは、茅簷とも人間とも取れるが、ここでは山と相対すると解釈する。

王安石は北宋の朝廷で宰相として活躍した政治家で、「新法」と呼ばれる急進的な政治改革を敢行しました。本誌「書人傳」では旧法党だった蘇軾や黄庭堅とは政敵で、二人の生涯に大きく影響を与えた人物として紹介しました。一方で詩人としては蘇軾や欧陽修からも高く評価され、特に絶句では北宋第一と称賛され、さらに散文家としても著名で、唐宋八大家の一人に数えられています。

鍾山は金陵（現在の南京市）の東北郊外にある玄武湖の東に聳える山です。現在は紫金山と呼ばれて南麓には孫文の陵墓中山陵があり、南京市の観光名所になっています。王安石は晩年、ひとり息子の夭折を機に鍾山の西南麓に隠棲し、政治の世界を離れて詩作に耽りました。王安石は王半山と号しましたが、鍾山と金陵のちょうど半分のところに庵を設けたからと言われます。この鍾山即事はその庵で詠んだひとつで、鍾山に春が訪れた情景を描写しています。

鍾山即事の結句「一鳥不鳴山更幽」は梁の詩人王籍の「蟬噪林逾静、鳥鳴山更幽」を典故として、意味を逆用して新たな色合いを持たせています。この手法は王安石を嫌う人々から批難されましたが、先人の詩句のイメージを受けついで変化させて詩を作ることは王安石の最も得意とするところで、やがて「江西詩派（黄庭堅の流れを汲む流派）」の特色となって「換骨奪胎法」と名付けられます。

また王安石はこの詩の句ごとに二字減らして別に五言絶句の一首を作り上げています。

「澗水繞竹流　花草弄春柔　相對坐終日　鳥鳴山更幽」

端的な詩ですが、結句が王籍の句と全く同じで妙味に欠けるとも言われ、人々に膾炙されるまでには至らなかったようです。

参考文献：中国詩人選集（岩波書店）・漢詩の辞典（大修館書店）・漢詩揮毫手帳（木耳社）・NHK漢詩紀行

昇格試験一般部〆切　５月２日（土）必着

雁塔聖教序

幽に乗じ寂を控き弘く萬品を濟い十方を典御するにおいておや。威（霊）を挙げて……
（第四部は乗から品までの前半八文字を半切１／２に臨書）

この部分は暢びやかな横画が特に印象的。点画のぶつかり合いを避けた明るさも特徴。細線を主体とした線で弱くならないよう心掛けたい。

蘭亭序

絲竹管弦之盛（第四部は管弦二文字を半切１／２に臨書）

秀麗で円熟した六文字。絲竹二字は同姿別情法といって左右強弱と形の変化を意識することが大切。全体的に字軸は左に傾いている。

書　譜

羲献之前規を挹む（王羲之や王献之の残した書法を学習する）

前回に続き半切に一行の臨書課題。気脈の貫通も難しいが、線の側直による太細の変化を捉えることが容易ではないと思う。書き込んで風趣を捉えたい。

春風渭水に生じ　春樹秦城を繞る　斜陽貪って久しく立つ　為に棹船の声を聴く

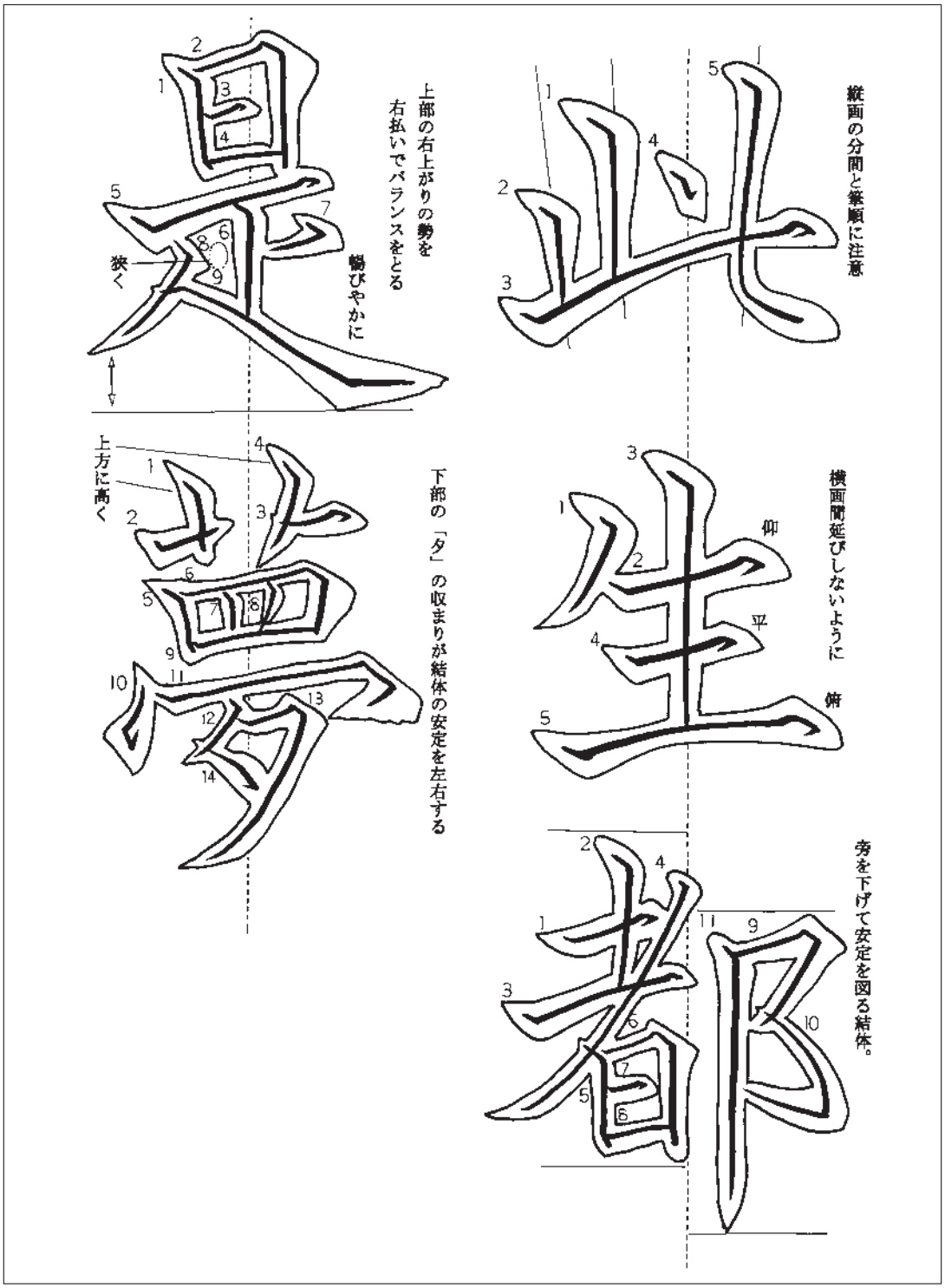
《大意》渭水のほとりに春風が吹き、秦城の辺りには新緑の樹が茂っている。夕日の光を浴びながらしばらく佇んでいると、どこからか船歌が聞こえてきた。（王文治詩・渭濱にて渡を待つ）

気和ぎ春浩蕩　心は静かに夢舒長

《大意》空気は和らぎ春は浩々と広がり、心は静かで夢ものどやかでさめにくい。（周昂詩句）

読み　此の生は都て是れ夢（この世はすべて夢・白楽天「商山路有感」）

佐藤象雲書



一般部規定課題出品について

・規定課題は段級の区別なく、右掲載の五字句となります。

・初段以下の方に限り、左に掲載してあるように二文字または三文字でも構いません。

・規定課題（楷書）の出品はひとり一点に限ります。

行　書

草　書

※成家・師範の随意作品出品は二点までです。

◇各体とも書風は自由です。特に上位者は古典などを参考に創意溢れる作品をご出品ください。

隷　書

次号課題

花を惜しみて春起早し

ペン字部課題　（４月30日〆切）

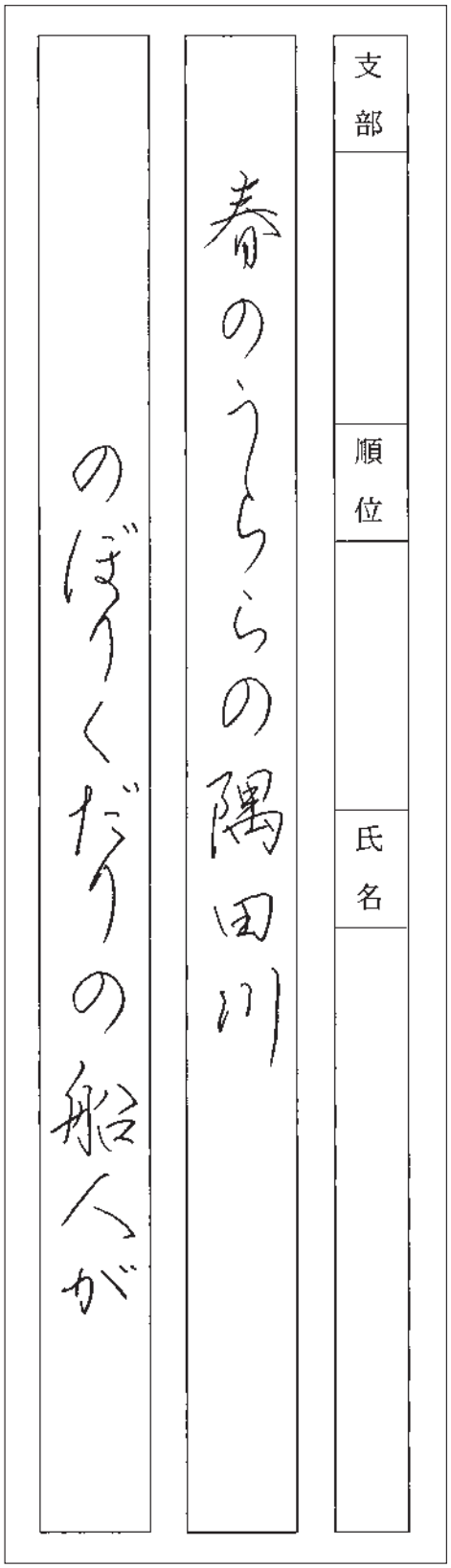
細字部課題　（４月30日〆切）

（両部とも本会所定の指定用紙を使用のこと）

佐藤象雲書

音　リョウシカテイ　チョウカンジンコウ

略解　昔、龍馬図を背負って出た王を龍師といい、火食の祖を火帝といった。鳥官は中国の官名、人皇は上に立つ三皇の一つで他に天皇と地皇がある。



和泉溪石先生書

若隠若顯

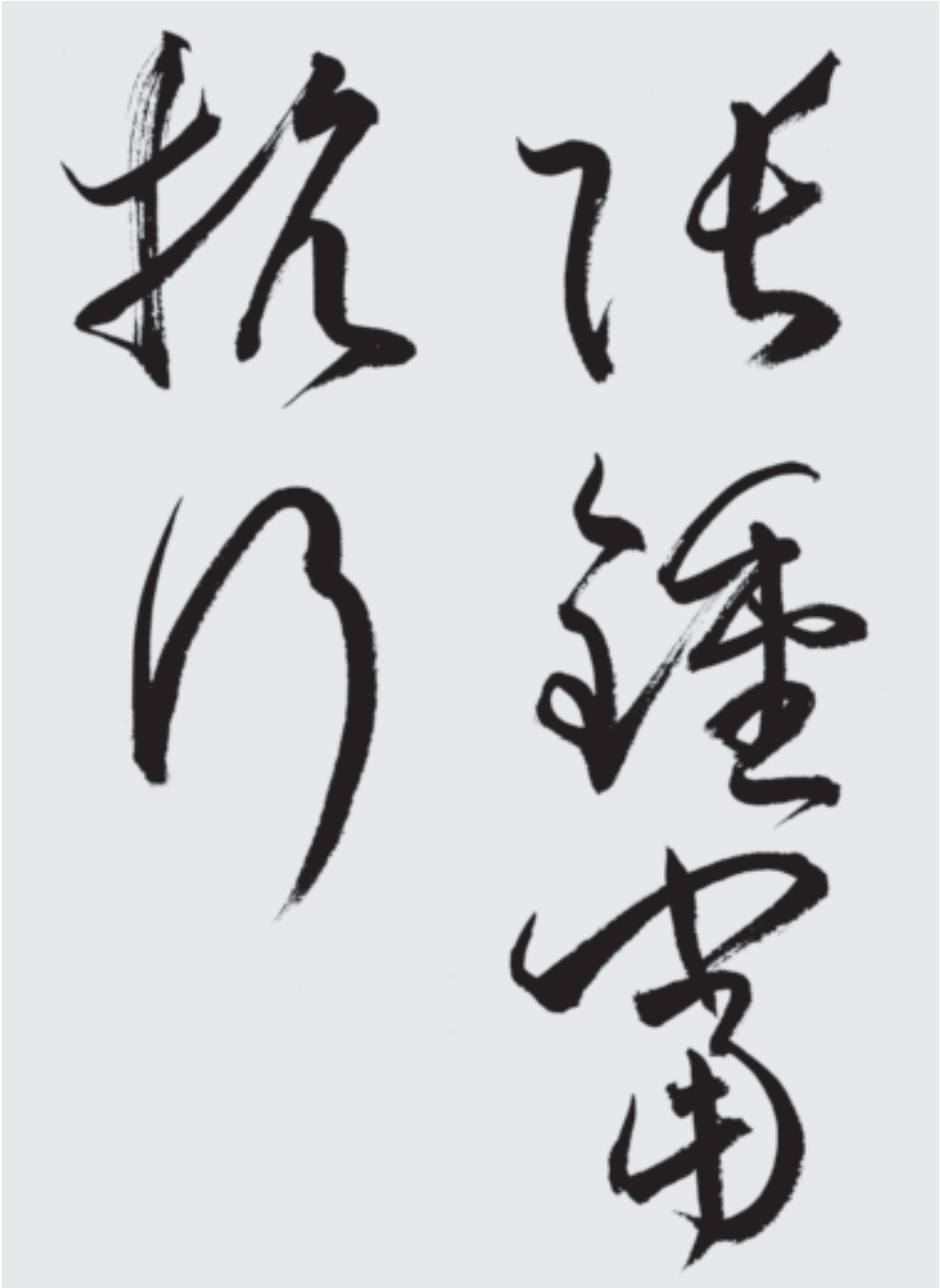
隠れたる若く顯れたる若く……

■褚遂良・雁塔聖教序（初唐・西暦六五三年）の臨書(23)

象雲臨

『若隠若顯』

一般的に書法は、筆法（筆遣い）と結構法（形の取り方）の二つに大別され、車の両輪と同じでいずれが欠けても体を成さないことになります。楷書は統一を重視する書体ですが、一方で筆法と結構法の変化も重要なことで、単調と惰性に陥らないようにする必要があります。今月の「若」は、結構法の変化は容易に見てとれると思いますが、併せて長い横画に見られるような起筆の角度を変えているように、筆法の変化も見逃さないように注意深く原帖を観察して臨書してください。また「隠」と「顯」はいずれも偏と旁からなる結体ですが、偏旁の優劣の違いや高さの変化なども見逃さないように注意する必要があります。



鍾には當に抗行すべし……

象雲臨

■孫過庭・書譜（初唐・西暦六八七年）の臨書（5）

『鍾當抗行』

書譜の作者孫過庭に関しては正史には記載がなく、官位が低かったため伝記も少なく、生没年も不明で生誕地も諸説あります。また書譜以外に有名な作品がなく確かな人物像は伝わっていません。しかしこの書譜の書論としての内容と、書譜の見事な筆致によって書道史においての不動の地位を確立しています。この書譜は王羲之の書法をよく理論的に分析し、実践している肉筆であるという観点から、王羲之書法学習の中継基地の位置づけができるということは前回述べた通りです。書の名蹟の収蔵家としても有名な宋の米芾は、王羲之の様々な帖に精通していたようですが、米芾が著したと伝えられる「書史」には書譜を称して「草書書論、甚だ右軍（王羲之）の法有り」と記載されていますが、書譜を一番端的に表現していると思います。今月の四文字は料紙の剥離による部分欠損が見られますが、非常にしなやかな筆使いで、直筆を基本とした暢びやかで美しい線が印象的です。